

単元ごとに児童の評価を蓄積し 丁寧な支援に生かす

茨城県 高萩市立東小学校

学力の伸び悩みが大きな課題となっていた高萩市立東小学校。2008年度から、評価に関する研究を始めたのを機に、問題解決型の授業を導入した。指導と評価の一体化を図った結果、基礎・基本が定着し、成果は目に見える形で表れている。

背景・課題

- ◎学力が低迷し、「全国学力・学習状況調査」などの結果は全国・県平均を下回っていた
- ◎保護者の教育への関心はあまり高くなく、勉強は学校に任せているという雰囲気があった

評価に関する取り組み

- ◎子どもを伸ばすための評価の研究に取り組み、指導と評価の一体化を図った
- ◎問題解決型の授業を取り入れ、評価規準や座席表などの評価方法を工夫した
- ◎県一斉に行う「学力診断のためのテスト」の結果を分析して、指導に生かした

成果

- ◎算数での「指導と評価の一体化」を軸にした授業改善が、他の教科にも波及した
- ◎「学力診断のためのテスト」の結果が飛躍的に向上した
- ◎教師が指導に責任感を一層持つようになった

背景

「勉強は学校に任せている」地域で学力に大きな課題

高萩市立東小学校は、2008年度に国立教育政策研究所の指定で、評価に関する研究を始めた。子どもは元気で活発であるが、学習への主体性は弱いという課題があった。また、同校がある地域は教育への関心が高くない、保護者の家庭学習への理解もあまりない状況だった。

そうした影響もあり、子どもの学力は全体的に低く、文部科学省「全国学力・学習状況調査」の結果は全国・県平均を下回っていた。

S c h o o l D a t a

◎1958(昭和33)年創立。「友愛」「自立」「礼儀」「健康」が校訓。2008年度から3年間、国立教育政策研究所の指定で「確かな学力をはぐくむための指導と評価の研究」に取り組んだ



校長 大内富夫先生

児童数 298人 学級数 14学級(うち特別支援学級2)

所在地 〒318-0012 茨城県高萩市有明町1-141

TEL 0293-22-2542

URL <http://edu.city.takahagi.ibaraki.jp/higa-es/>

公開研究会 未定

子どもが伸びる学習評価

研究主任の木村裕子先生は当時を次のように振り返る。

「研究指定を受けたものの、3年間で成果が上がらなかつたらどうしようという不安がありました。どうすれば子どもを伸ばす評価が出来るのか、学校全体で検討しました」

検討の結果、研究テーマは、指導と評価の一体化を図り、子ども一人ひとりを丁寧に見取りながら指導を改善することとした。対象は、算数の「数と計算」に絞った。

■評価の工夫①

問題解決型の課題を取り入れ 評価規準をより具体的に明示

まず取り組んだのは、学習のきまりを定着することだった。定規や下敷きなど決められた学習用具を必ず持つてくるように徹底するなど、授業態度の指導から始めた。

同時に、授業は問題解決型を土台とし、流れを統一させた。授業の冒頭で、問題を提示する。児童は「分かっていること」には実線、「聞かれていること」には波線を引く。更に、見通しを持たせ、本時の課題をつかませる。次に、児童は個別に課題解決に取り組む。そして、ペアやグループになり、自分の考えを発表したり、全体で話し合ったりして結果をまとめる。最後は、授業の理解度を測る「評価問題」に取り組み、自己評価を記入して、授業の振り返りをする。

評価は、子ども一人ひとりの取り組み、評価問題、振り返りカードの結果を踏まえて行う。子どもを適切に見取るために、単元ごとに評価規準を作成した。工夫したのは、規準をより具体的に明記し、C評価からB評価に引き上げる手立ても盛り込んだことだ(図1)。

「単に評価はCとするのではなく、Cの子どもが授業を理解できるようにすることが重要だと考え、評価規準に支援の手立てを明記することにしました。一方、A評価も、規準に達していればそれで終わりではありません。ABCの状態を明確に言語化したことで、教師が子どもを見取りやすくなり、その後の手立ても考えやすくなりました」(木村先生)

■評価の工夫②

各授業の評価を座席表に表し 単元を通して支援をする

評価を指導に生かすために活用しているのは「座席表」だ(P.20図2)。これは、座席と同じ順に、子どもの授業ごとの評価を書き込める用紙で、単元ごとに作成する。

図2を例に見てみよう。左に座る子ども「ア」は、1時間目はC評価だった。教師のメモには、「数直線のかき方」が「×(出来なかつた)」だったため、次の時間は支援として「ヒントカード」を用いると記されている。その結果、2時間目には理解が深まり、



高萩市立東小学校校長
大内 富夫 おおうち・とみお
「小学校時代に種をしっかりと植え付けてあげれば、適切な時期に自らの力で開花していく」



高萩市立東小学校
木村 裕子 きむら・ひろこ
研究主任。「子どもたちのために」を第一に考え、「わかつた」「できた」という喜びを伝えたい」

B評価になった。子ども「イ」は、1時間目はB評価だったが、2・3時間目はA評価となっている。

「B評価からA評価へと理解を高める指導には、『どうしてこう考えたのか』といった

図1 評価規準の例 5年生算数

評価規準	A: 十分満足な状況	C: 努力を要すると判断された児童への具体的な支援
	<ul style="list-style-type: none"> 除数が帯小数の場合にも除法の意味を拡張してとらえ、既習の整数の除法に関連付けて、小数で割る除法の計算の方法を考えようとする。 小数の割り算の意味と計算の仕方を計算のきまりや数直線、図などを使って考える。 	<p>＜発表・ノート・振り返りカード・評価問題＞</p> <ul style="list-style-type: none"> A 既習の整数の除法を積極的に生かし、小数で割る除法の計算方法を考えようとしている。 図、数直線、言葉、式を用いて、2.4を整数化するために96と2.4を10倍して計算し、計算の仕方を言葉で説明することができる。 C 整数の除法の形にすることで、既習の計算方法が生かせることをおさえる。

評価規準と共に、十分ねらいを達成している状態と、必要な支援を具体的に記している
*同校の資料を一部抜粋して編集部で作成

教師の補助発問によって考えを深めさせたり、発表や話し合いを通して友だちの考えを聞き、新たな考えを獲得させたりすることなどがあります」（木村先生）

授業の終盤に行う評価問題は、子どもの授業の理解度を把握するために重視する。主に知識を習得するための授業では、知識を問う評価問題を出すのが、考え方を学ぶ授業では記述式問題にして理解度を測る。

「授業は、最終的に評価問題が解けることを目指して計画しますから、解けない子どもがいれば、指導に課題があったということになります。子どもにとつて適切な授業だったかどうかは、この評価問題に反映されるのです。その結果を踏まえ、教師は次の授業を計画し直します」（木村先生）

研究が進むにつれ、評価問題の正答率は高くなった。子どもの学力が伸びたことに加え、教師がねらいを踏まえた授業を計画できるようになったことが大き

図2 座席表形式の評価記録用紙

ア				イ					
①	A	B	C	数直線のかき方 X → ヒントカード	①	A	B	C	テープ図
②	A	B	C	ヒントカード	②	A	B	C	数直線 プリントA
③	A	B	C		③	A	B	C	プリントA
④	A	B	C		④	A	B	C	
⑤	A	B	C		⑤	A	B	C	

単元ごとに座席と同じ順で評価を記入する表を作り、授業の評価を記録し、必要な支援などをメモする。単元を通した子どもの変容がよく分かる
*同校の資料を一部抜粋して編集部で作成

図3 「振り返りカード」 6年生算数の例

今日の算数はどうだったかな？（学習をふり返ろう）			
単元名		分数のわり算を考えよう	
6年 組 番		名前	
月	時間	今日の課題	自己評価(◎○△)
5/21	1	分数÷分数の計算のしかたを考えよう	分母のわり算も、整数のわり算と同じように式を立ててやることか分かった
5/22	2	計算のしかた	分数÷分数も公式があることか分かった
5/23	3	約分・整数のわり算を工夫	わり算でも中割り分ができて、整数も分数にできることが分かった
5/28	4	3つの分数と帯分数のわり算かけ算	帯分数では、分子と分母を別々にかけ算して、式を立てて計算できる
5/29	5	小数÷分数の計算のしかたを考えよう	小数÷分数・整数×分数は、分数×分数になることか分かった
5/30	6	問題を解く	コツさえ覚えれば、かんたんにできる
5/31	7	どのような計算をするよいか考えよう	何を求めるときも、整数と同じように分数でもできることか分かった
6/1	8	それ以外の物の値段の求め方考えよう	問題をよく読めば、おもしろい問題も分かることか分かった
6/4	9	雑誌の値段を比べよう	3パターンの中でほか計算のわり算が、この問題で使われています
6/5	10	かえりける問題の答え合わせと自分の考えの検証	自分のまちがいの原因を自分でかき出すのが、よく分かった

「振り返りカード」に授業の最後に分かったことや自己評価を記入する。子どもの感想や理解度に合わせて、教師がコメントを返す
*同校の資料をそのまま掲載

という。

評価の工夫③

子どもの振り返りを教師がきちんと評価する

授業の最後に、子どもは「振り返りカード」にその授業の課題、分かったことや感想を書き、「頑張ったか」「分かったか」をそれぞれ3段階で自己評価する(図3)。カードは毎時間提出し、担任がその自己評価を確認する。「何が分かったのかを振り返ることで、次の授業につながります。『明日はこれをした

い」といった記述もあり、授業を計画する上の参考にもなります」（木村先生）
単元の評価には「評価補助簿」を用いる。これは、評価規準の各項目をA=3点、B=2点、C=1点と点数化し評価するもので、最後に全体の理解を確認する「総括の評価問題」の評価を2倍にして加えて計算する。例えば、評価規準が3つある場合、ある子どもは「(2+3+2+2×2)÷5」で計算され、平均は2.2と算出される。単元の評価は「AV2.5IVBIV1.5VC」であるため、単元評価はBとなる。

子どもが伸びる学習評価

また、茨城県が実施している「学力診断のためのテスト」（3～6年生で国語、社会、算数、理科）の結果も指導などに活用している。経年でデータを分析し、一人ひとりの弱点を把握。授業で補充指導をしたり、個別指導に生かしたりしている。

■成果

子どもの学力が大幅に伸び
教師の意識も変わる

3年間の研究成果の1つは、「学力診断のためのテスト」などの結果が飛躍的に向上したことだ。大内富夫校長はこう総括する。

「以前は、テスト結果が平均より10ポイント、良くない教科では20ポイントも下回っていましたが、10年度以降、3～6年生で、ほとんどの教科が平均を上回るようになりました。かつては市内で下位でしたが、今は上位に入るようになりました。指導と評価が改善された影響が大きいと思いますが、学習のきまりを整えたことや保護者に家庭学習への協力を呼び掛けたことも、好結果の要因だと考えています」

研究対象の算数以外の教科にも、指導改善が広がっていることも成果の1つだ。

「指導と評価の一体化により、子どもが授業の流れを理解したことを、他の教科でも生かしています。研究を通じて、『know how』ではなく、何のために指導や評価を改善する

かという『know why』に気付いたことで、先生方は大きく変わりました」（大内校長）

「指導や評価が変われば子どもが変わる」という事実を前にして、教師はこれまで以上に指導に責任感を持つようになり、研究に対しても前向きになった。現在は、国語の校内研究を進めている。国語の言語活動の研究は、自主的な取り組みだ。

「自己表現力を付けたいというのが以前からの願いでした。学力が平均レベルになり、やりたかった言語活動の研究に取り組みことが出来ました」（大内校長）

研究推進のため、教師の多忙感の軽減も図る。例えば、以前行っていた毎朝の職員会議は取り止めた。緊急時はメモやホワイトボードでの連絡で代用しているが、特に問題はないという。旺盛な研究意欲の背後にあるのが、「子どもたちのために」という思いだ。

「東日本大震災では、本校の校庭にも津波が押し寄せるなどの被害があり、子どもたちはそれぞれに心の傷を負っています。教師は必死に子どもを守り、今も精神面のケアに心を配っています。本来なら、勉強に集中できなくても無理はない状況ですが、教師の気持ちや伝わっているのか、子どもたちは前向きに育ってくれています」（大内校長）

そのような強い思いが根底にあるからこそ、研究によって高められた指導や評価の技法が授業の中で生きてくるのだろう。

学校をつくり、動かすチームワーク

校長の役割

目的がぶれないように明確に示し続けるのが、リーダーの役割と考えています。そして、方向性を伝えた後、具体的な実践については、主任の先生方に任せることを大切にしています。また、先生方の「子どもたちのために」という思いが、形として現れやすいような環境づくりに力を入れています。何より、「ピンチを楽しみながらチャンスに変えていこう」とする校長の姿勢が最も重要なことだと思います。

校長 大内富夫先生

ミドルリーダーの役割

誰も1人で研究を進めることは出来ません。先生方の思いをくみ取って調整役になり、組織を動かしていくことが主任の役割だと思います。一人ひとりの教師が1歩ずつ前に進んで、チームとして動けるような体制をつくりたいと、いつも考えています。そのためには、「やらされている」のではなく、「やってよかった」という思いを持って研究が出来るように、研究内容を考えていくことも、主任の仕事だと思っています。

研究主任 木村裕子先生